

# 葡萄棚

永井荷風

青空文庫



浅草公園の矢場銘酒屋のたぐひ近頃に至りて大方取払はれ  
 し由聞よしきつたへて誰たれなりしか好事こうずの人の仔細うちらしく言ひけるは、  
 かかるいぶせき処のさまこそ忘れやらぬ中絵うちにも文ふみにもなして写  
 し置くべきなれ。後に至らば天明時代の蒟蒻こんにやくほん本とも相並びて  
 風俗研究家の好資料ともなるべきにと。この言あるいは然しからん。  
 かの唐人とうじん孫綰そんけいが『北里志ほくりし』また崔令欽さいれいきんが『教坊記きょうぼうき』の如  
 きいづれか才人一時の戲著ぎちよならざらんや。然るに千年の後、今な  
 ほ風流詩文をよろこぶもの必ずこれを一読せざるはなし。われさ  
 きに「大窪多与里おおくぼたより」と題せし文中いささか浅草のことを記せり。  
 その一節に曰いわく、

ようきゆうば  
 楊弓場の軒先に御神燈出すこといまだ御法度ならざりし頃  
 いえな  
 には家名小さく書きたる店口の障子しょうじに時雨しぐれの夕ゆうべなぞ榎えのきの落お  
 ちば  
 葉ちばする風情ふぜい捨てがたきものにてそうら※ひき。その頃この辺の矢場  
 ひしかけまど  
 の奥座敷に昼遊ひしかけまどびせし時そぼ肱掛窓そぼの側に置きたる盃はいせん洗せんの水  
 にいかなるはづみにや屋根を蔽ふ老樹の梢を越して、夕日に  
 染みたる空の色の映りたるを、いと不思議に打眺め※事今だ  
 まげみ  
 に記憶致まげみをり※。その頃まではこの辺の風俗も若きは天神てんじん  
 わ  
 鬚三ツ輪まげみまたつぶしに結綿ゆいわたなぞかけ年増としまはおさふねお盥たらひ  
 はんてん  
 なぞにゆふもあり、絆纏はんてんのほか羽織はおりなぞは着ず伝法でんぼうなる  
 はんげんぶく  
 好みにて中には半元服はんげんぶくの凄き手取りもありと聞きしが今は  
 いなか  
 鼻唄いなかの代りに唱歌唄ふ田舎いなかの女多くなりて唯わけもなく勤め

すまずを第一と心得※故遊びが楽になりて深く迷込む恐れもなく誠に無事なる世となり申※。

ごとうちゆうがいし

後藤宙外子ごとうちゆうがいしが作中たしか『松葉かんざし』と題せし一篇あり。

浅草の風俗を描破する事なほいちよう一葉女史が『濁江にごりえ』の本郷ほんごうまる

丸山やまにおけるが如きものとおぼえたり。天外子が『楊弓場ようきゆうば』の

一時間』は好箇の写生文なり。『今戸心中いまどしんじゆう』と『浅瀬の波』

に明治時代の二遊里を写せし柳浪りゆうろう先生のかつて一度ひとたびも筆を

この地につけたる事なきはむしろ奇なりといふべくや。『湯島ゆしまも詣うで』の著者また浅草を描きたることなきが如し。

ちまた巷ちまたに秋立ちそめて水菓子屋の店先に葡萄ぶどうの総涼ふさぎしき火影ほかげに照さ

るるを見る時、わが身にはいつも可笑おかしき思出の浮きたび来るなり。

およそ見る物同じといへども見る人の心異ればその趣もまた同じからず。一茶いっさいが句には

一番の富士見ところや葡萄棚

といふがあり。葡萄の棚より露重げに垂れ下る葡萄を見上れば小みあぐ暗ぐらき葉越しの光にその総ふさの一粒一粒は切きり子硝コガラス子の珠たまにも似たるを、秋風のややともすればゆらゆらとゆり動すさま、風前の牡丹花にもまさりて危あやくいたましくまたやさしき限りなり。

しまぎきとうそんし

島崎藤村うち子が古ふるき美文の中にも葡萄棚のこと記せしものありしやに覚おぼゆ。

今わが胸うかびに浮うかび出いづる葡萄棚の思出はかの浅間あさましき浅草あさにぞありける。二十はたちの頃なりけり。どんよりと曇りて風なく、雨にもな

らぬ秋の一日、いちにち浅草伝法院でんぼういんの裏手どべいなる土塀どべいに添える小路こうじを通  
 り過ぎんとして忽ちたちまとある銘酒屋めいしゅやの小娘たもとに袂引たもとかれつ。大きな  
 潰島田つぶしまだに紫色ゆいわたの結綿ゆいわたかけ、まだ肩かたあげ揚あげつけし浴衣ゆかたの撫肩なげかた  
 ほつそりとして小づくりなれば十四、五にも見えたり。氣の抜け  
ビールし麦酒一杯のみて後娘のちはやがてわれを誘いざなひ公園の人込の中をば先  
 に立ちて歩む。その行先まぢやいづこぞと思へば今区役所の建てる通とおりの  
 中ほどにて、町家まぢやの間に立ちたる小さき寺の門なりけり。門の中  
 に入るまで娘は絶えず身のまはりに氣をくばりてゐたりしが初め  
 て心おちつきたるさまになりてひしとわが身に寄添よぞへひて手を取り、  
 そのまま案内も請こはず勝手かたてぐち口くちを廻くりて庫裡くらの裏手うらてに出づ。と見  
 れば葡萄棚ありてあたり薄暗し。娘は奥まりたる離座敷はなれざしきとも覺

しき一間ひとまの障子外より押開きてづかづかと内に上り破れし襖ふすまより夜のもの取出とりいだして煤すすけたる畳の上に敷きのべたり。

あまりといへば事の意外なるにわれはこの精舎しょうじやのいかなる

訳ありてかかる浅間しき女の隠家かくれがとはなれるにや。問はまく思

ふ心はありながら、また寸時も早く逃のがれい出でんと胸のみ轟かすほ

どに、やがて女はわが身を送出でて再び葡萄棚の蔭を過ぐる時熟みの

れる一総ひとふさの取分けて低く垂れたるを見、栗鼠りすのやうなる声立て

てわが袖を捉へ忽ちわが背に攀よぢつ。片腕あらはに高くさしのべ

力にまかせて葡萄の総を引けば、棚おそろしくゆれ動きて、虻あぶあ

また飛とびいづ出る葉越しの秋の空、薄く曇りたれば早やたそがるるか

と思はれき。本堂かたの方に木魚もくぎよ叩く音ものういとも懶し。

われその頃より友人に教へられてかのモオパッサンが短篇小説  
読み始むるほどに、曇りし日の葡萄棚のさま、何となく彼かの文豪  
が好んでもものする巴里パリナワンチュールの好事の中にもあり気げなる心地せられて遂  
に忘れぬ事の一つとはなりけり。怪しきかの寺なほありや否や。

大正七年八月



# 青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 葡萄棚

永井荷風

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>